

## 中世イスラーム世界の黒人奴隷と白人奴隷：〈奴隷購入の書〉を通して

清水, 和裕  
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門：准教授：中世西アジア史

<https://doi.org/10.15017/13884>

---

出版情報：史淵. 146, pp.153-184, 2009-03-01. Faculty of Humanities, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

# 中世イスラーム世界の黒人奴隷と白人奴隷

—〈奴隷購入の書〉を通して—

清水和裕

## 1. はじめに

前近代イスラーム世界の奴隷制を包括的に理解しようとした場合、特権的な地位を担った奴隷エリートのあるあり方と、近代以降に報告されるアフリカにおける奴隷生産現場の現実、そして社会に遍在するがゆえに史料が特別な目を注ぐことのない家内奴隷たちの日々のあり方の間には、それぞれ非常に大きな乖離が存在することに気が付く\*1。このためイスラーム世界の奴隷制はその重要性に比して、包括的な研究がきわめて限られているのが現状である。

そのような中で、アラブ・イスラーム研究の泰斗 B. ルイスが著した『中東における人種と奴隷制 (Race and Slavery in the Middle East)』は、この奴隷制の包括的な理解を試みた著作である。このためこの著作は、イスラーム研究以外の各分野の奴隷制研究に大きな影響を与えている\*2。しかし、同書にはひとつの大きな問題点が存在する。それは、奴隷制と人種差別論を連動させることで、均整のとれた奴隷制度研究というよりは、実質的に「黒人」奴隷制研究を通した黒人差別発生論となっている点である。

もちろん、奴隷制度と、特定集団に対する社会的な差別や人種差別が密接な関係をもつことに異論はない。しかし、ルイスの著作は奴隷制一般の問題を、特に「黒人」に集中させ、「黒人」が奴隷として差別的な扱いを受けていたことだけに議論を集中させている。その結果として、同書の議論は、1. イスラーム世界でも黒人は差別的扱いを受けていた。2. これはイスラーム世界の成立によって多数の黒人が奴隷化されたため、奴隷に対する差別が黒人偏見を生ん

だためである。3. これに比して白人奴隷はエリートとして用いられたため白人に対する偏見は生じなかった。4. すなわち、世界史上、黒人に対する差別はイスラーム世界の形成によって発生した、という、非常に単純化されたものとなっている [Lewis 1990: 28-42]。確かにルイスの指摘するように、イスラーム世界には「黒人」に対する偏見や差別が存在した。しかし、ごく一部の奴隷エリートの存在のみをクローズアップすることによって、イスラーム世界の奴隷制全般を論じることができないが、一方で「黒人」差別という側面のみをもって、この奴隷制全般を論じることが誤りである。ましてや、ルイスの議論はきわめて大雑把なものであって、膨大な歴史史料から「黒人」に対する差別的言説」とおぼしきものを、次々と並列的に並べ立てるに過ぎない。

ルイスの論じる「黒人」「白人」概念の妥当性から、差別的言説に対する解釈の問題まで、ルイスの議論には再検討すべき点が数多く残されている。そのうえで、「黒人」を含むイスラーム世界の様々な奴隷のあり方と、それに対するイスラーム社会内部の認識のあり方、そしてそれぞれの奴隷の機能と社会的プレゼンス、また差別と支配の問題、生産現場と消費現場の実態と相互関係などを包括的に明らかにしていかなければならない。

以上のような問題意識を背景として、本稿では、〈奴隷購入の書〉と総称されるジャンルの著作2点の一部分を訳出し、そこからイスラーム世界において奴隷と人種がいかなる形で認識されていたのかを確認して、ルイスの議論の再検討を図りたい。同時に、これをめぐる議論に対して若干の新たな指摘を行う予定である。

## 2. 〈奴隷購入の書〉における人種とその性格

### (1) 概略

〈奴隷購入の書〉は文字通り奴隷を購入する際のガイドブックである。奴隷を購入する際の心構え、特に購入前に何度も奴隷を点検し即断即決を避けること、買い気にはやらず落ち着いて購入すること、祝日の祭りなどに衝動買いをしないことなどが、繰り返し述べられる [Ibn Buṭlān: 395-397; Amshāṭī: 35-39]。

また、購入に際して気をつけるべきチェックポイントや、売り主の用いる詐術などにも触れられている。

類書のうちもっとも有名なイブン・ブトラーンによる『奴隷の購入と検査に関する有益な知識の書 (Risāla Jāmi‘a li Funūn Nāfi‘a fī Shirā‘ al-Raqīq wa Taqlīb al-‘Abīd)』は、日本においても佐藤次高がその内容を紹介したため、つとに知られるようになった [佐藤 1991: 24-34]。著者イブン・ブトラーンは西暦11世紀前半に活躍したネストリウス派キリスト教徒の医学者・神学者である。バグダードで生まれ育ち、医学・哲学を教えていたが、440/1049年にその地を発ったのちはシリア、カイロ、コンスタンティノープルなどを巡り、447/1054年頃再びシリアに戻って、458/1066年にアンティオキアで死去した。その生涯の前半生をバグダード、後半生をシリア北部で過ごしたと言って良いであろう。医学、薬学などに関する著作をのこしており、『奴隷の購入と検査に関する有益な知識の書』もまた、彼の医学的・科学的な関心が強く反映した内容となっている。全6章にわたって、奴隷購入の心得の他、購入に際して点検すべき身体の部分や、観相術からみた身体特徴と性格の関係などが述べられている。

以下に訳出したのは、その第4章「生育地や土地に応じた奴隷の人種の記述」の後半部であり、全25節中20節を含む主要部分である。ヒンド人から始まって19の「人種」について、その奴隷としての特性が個別に記述されている。ここで「人種」と訳出したのはアラビア語の *jins* (pl. *ajnās*) である。この語の使用については、本稿第3章第1節に述べる。また当該部分はすでに佐藤 1991: 28-30に日本語抄訳、Müller 1980: 66-71に独訳が存在する。

一方、イブン・ブトラーンの著作と並んで紹介するのは、アムシャーティーの『女奴隷と奴隷を選ぶための正しき助言 (al-Qawl al-Sadīd fī Ikhtiyār al-Imā‘ wa al-‘Abīd)』である。著者のアムシャーティー自身に拠れば、先行するイブン・アルアクファーニー (Ibn al-Akfānī, d. 749/1348) の著作『奴隷の検査に関する監督と監視 (al-Nazar wa al-Taḥqīq fī Taqlīb al-Raqīq)』が不十分であるため、観相術に関する知識を足すことによって同書を著したという [Amshāṭī: 32] が、〈奴隷購入の書〉全般を調査したミュラーは、アムシャー

ティーが底本としたのは13世紀に執筆された著者不明の『奴隷の購入に関する監視 (al-Taḥqīq fi Shirā' al-Raqīq)』であり、そのさらに元となったのがイブン・ブトラーンの著作であったとする [Müller 1980: 109-115]。以下に掲げる翻訳部分をみても、イブン・ブトラーンの著作の直接、もしくは間接的な影響下にあることは明らかである。しかし、実際の文章の細部を見ればわかるように、アムシャーティーの記述は、イブン・ブトラーンの記述と量的にもまた内容的にも大きく異なる点をもっており、この点についてはのちに具体的な分析を行う。

アムシャーティーを校訂したヤルムーク大学教授ムハンマド・イーサー・サーリヒーヤに拠れば、著者は Maḥmūd b. Aḥmad b. Ḥasan b. Ismā'īl b. Ya'qūb b. Ismā'īl Muẓẓafar al-Dīn b. al-Imām Shihāb al-Dīn al-'Aynābī, Abū al-Thana' al-'Aynī であり、通称 Ibn al-Amshāṭī といった。このニスバは彼の祖父がアムシャートで商売をしていたからであるという。カイロで812/1409年に生まれ、法学・文法学・医学などを学んだ。しばしばグマスカスを訪れたほか、メッカ巡礼にともなってメッカに滞在し、また前線に異教徒と戦ったという。ザーヒリーヤ学院などの長を歴任し、またマンスーリーヤ学院やトゥールーン・モスクで医学を教授した。医学・法学などについての複数の著作を著し、902/1496年にカイロで死去している [Amshāṭī: 21-22]。

今回訳出した部分は3章構成の第1章「世界の人種の記述、および自由人、女奴隷、奴隷 ('abīd) の各人種が隠している性格、特徴、本性、善き行いと醜き行い、またこのことにおける、それと関係する有益な知識」の後半である。この章はイブン・ブトラーンの第3章に相当するが、前半のアラブに関する記述は、紙幅の都合から割愛した。アラブに関しては、アムシャーティーは自由身分のアラブを念頭に記述を行っていると思われる [Amshāṭī: 43]。また同書には、ミュラーの独訳が存在する [Müller 1980: 119-155]。

なお、以下の訳出に際しては、ふたつの本文の異同を明確にするため、日本語の文意を通すことよりも、単語の共通性を保持することを優先した。このため日本語としては未消化な印象を与える部分が相当箇所存在するが、了解され

たい。また各「人種」の通し番号は便宜的に論者が割り当てたものであり、〔 〕は論者の補いである。

(2) イブン・ブトラーン『奴隷の購入と検査に関する有益な知識の書』(部分)

これについて、土地のそれぞれに特徴が存在する。全20節。その詳細は、

1. ヒンド人女性(Hindīyāt)。東方の南部の最初の土地。彼らには、体型の良さ、色の茶色さ〔txt. 404〕、肌が黄色く清らかで豊かに恵まれた美、息の香しさ、柔軟さ、なめらかさがある。しかし、彼らには老化が素早く訪れる。彼らには約束への誠実さと愛情、非常な世話好きさ、底の深さ、弁舌の鋭さ、心の愛しさがある。彼らは軽蔑に耐えられず、殺人に痛みを感じない。必要があり怒ったときには大罪すら犯す。女たちは子を為すのに適し、男たちは名誉と財産を守ること、細かい工芸の仕事に適している。ただし、衰え(nazalāt)が素早く訪れる。

2. スインド人女性(Sindīyāt)。東と南の間にいる。彼ら同士の土地が隣であるため、彼らはヒンドに似て近い。ただし、女は腰が細く髪が長いことで違っている。

3. メディナ人女性(Madanīyāt)。色が茶色く、体形が中庸である。彼女たちには言葉の甘さと体躯のなめらかさ、気品、色っぽさ、艶っぽさ(shikl)と肌の善さが集まっていた。女たちは、男に関して嫉妬し合うことがなく、わずかなもので満足し、怒ることなく叫ぶこともない。彼女たちの中にはザンジュ人がおり歌姫に適している。

4. ターフ人女性(Ṭā'ifiyāt)。金色がかかった茶色で小柄。神の被造物の内でもっとも魅力的にして、もっともユーモアと冗談に富んだもの。彼女たちはウンム・ワラドではなく、なかなか妊娠せず、産褥で死んでしまう。その男たちは、もっとも激しく求愛し、ひたすら打ち解けており、もっとも歌がうまい。

5. ベルベル人女性(Barbarīyāt)。ベルベル島出身である\*<sup>3</sup>。その島は西と南の間にある。彼らの色は大部分は黒であり、彼女たちのなかには黄色もいる。もし母がクターマ、父がサンハージャ、育ちがマスムーダの女を見つけたなら

ば、あなたは、彼女が生まれついて服従的で、あらゆることを実行することを  
知るであろう。[txt. 405] 彼女たちは精力的に奉仕をし、子供を育てることと  
心地よいこと (ladhdha) をすること\*4に適している。というのは彼女たちほど  
子供の面倒をよく見るものはいないからである。

アブー・ウスマーン——この人物はこういった件のブローカーであるが——が  
言うには、

「バルベル人女性に、[様々な]人種の良さが集まるとはこういったことである。  
彼女は9歳で連れてこられ、メディナに3年、メッカに3年いて15歳でイラク  
に至った。イラクでは教養を身につけ、25歳で所有された。これが各人種の良  
さとして集まったのだった。メディナ人女性の艶っぽさ、メッカ人女性の女ら  
しき、イラク人女性の教養。彼女は瞼の内に隠され目の内に置かれる価値があっ  
た。」

6. イェメン人女性 (Yamānīyāt)。人種においてはエジプト人女性、本性  
(khalq) においてはバルベル人女性、艶っぽさにおいてはメディナ人女性、女  
らしさにおいてはメッカ人女性である。彼女たちはウンム・ワラドであり、顔  
が善く、アラブにそっくりである。

7. ザランジュ人女性 (Zaranjīyāt)。ザランジュと呼ばれる土地の出身であ  
る。イブン・フルダズビーに拠れば、この土地とムルターンの間までは二ヶ月  
行程である。ムルターンはヒンドの中部にある。この人種の特徴として、性行  
為をして汗をかくと、彼女たちから麝香のような汗が現れる。しかし彼女たち  
は子を為すには適していない。

8. ザンジュ人女性 (Zanjīyāt)。彼女たちに似たものは多い。彼女たちの黒  
さが (sawād) が増せば増すほど、彼女たちの姿は醜くなり、彼女たちの歯は  
鋭くなる。また彼女たちの使い道は少なくなり、彼女たちのもたらす害は恐ろ  
しくなる。そして一般に彼女たちは本性が悪しく、頻繁に逃亡する。彼女たち  
の本性には憂いがなく、踊りとリズムが彼女たちの天分であり、性質である。  
彼女たちはアラビア語がなまっているため、[会話ではなく]笛吹きと踊りに逸  
れてしまうのである。「もしザンジュが天から地へ落ちたとしたら、リズムに

乗って落ちるだろう」と言われている。彼らは唾が多いので口中が最も綺麗な人々である。彼らに唾が多いのは消化機能が腐っているからである。彼女たちには、苦役 (kadd) に対する耐性がある。ザンジュ [男] は満腹になれば、[txt. 406] 懲罰を与えても苦痛を感じない。腋臭、体軀の粗野さゆえに、彼女たち [と性交をすること] に快樂はない。

9. エチオピア人女性 (Ḥabashīyāt)。彼女たちは一般的に体軀がなめらかで、柔らかく、弱い。しばしば結核と消耗熱が彼女たちを見舞う。彼女たちは歌にも踊りにも楽器奏者にも適しておらず、育った土地以外に適応することもない。彼女たちには、すばらしさと親切さ、従命における従順さがあり、名誉について任せるのに適している。彼女たちは心の力と肉体の弱さで際だっており、これはヌビア人が、その細身の肉体の強さと心の弱さで際だっているのと同様である。消化機能が弱いので命が短い。

10. メッカ人女性 (Makkīyāt)。女らしく、素直で、手首が柔らかい。彼女たちの色は茶色がちの白で、体型は善く、体軀を外套で包んでいる (multaffa)\*<sup>5</sup>。彼女たちの口中は綺麗で冷たく、その髪は巻き毛であり、その眼は気怠げで物憂げである。

11. ザガーワ人女性 (Zaghāwīyāt)。本性が荒廃しており、怒鳴り声を上げる。肥大した肝臓\*<sup>6</sup>と邪な本性は、彼女たちが恐るべき行為 ('amal 'aẓīm al-af'āl) を行うようにする。彼女たちはザンジュよりも、またあらゆるスーダーンの人種よりも邪である。彼女たちの、女は快樂に適しておらず、男は奉仕に適していない。

12. ブジャ人女性 (Bajāwīyāt)。南と西の間で、エチオピアとヌビアの間の地。彼女たちの色は金色がかっており、顔が善く、体軀につやがあり、肌がなめらかである。もし幼少で連れてこられたならば、虐待されるのを逃れており、快樂に向いたジャーリヤとなる。というのは彼女たちは、陰部の上部で、剃刀で肉全体を骨が見えるまで円く切り取られ、[そのことで] とても有名となっている。また男の乳首も切り取り、また彼女たちの膝の骨の一部を抜き取る。これは、報告者の推定に拠れば、[txt. 407] 彼らのうち歩きまわる者が疲れない

ようにするためである。勇気があり、盗みは彼らのうちでは性質であり天性である。このため彼らは財産を任されることはなく、倉庫係となるにも適していない。

13. ヌビア人女性 (Nūbiyāt)。スーダーンの諸人種のひとつである。彼女たちは、女っぽさと洗練さと脆弱さをもっており、その身体は、肌が柔軟で乾いており、鋭く且つ堅固で力がある。彼女たちが飲むナイルの水のせいで、エジプトの気候が彼女たちに合う。もしエジプト以外に移されると、彼女たちを血の疾患や重篤な病気が襲う。ささやかな痛みでも彼女たちの体躯を苦しめる。彼女たちの本性は清浄であり、その姿は悪くない。彼女たちには、宗教心とすばらしさと自制心と節制心、購入主たち (mawlā) たちへの従容があり、奴隷身分 ('ubūdīya) を天分とするかのようである。

14. カンダハール人女性 (Qandahāriya)。ヒンド人女性のようにである。彼女たちには、すべての女に優るところがある。というのは、処女でなくなったものも処女のようになるからである。混血で黄色いものは父にも母にも由来し、両者が混じっており、その本性も両者からなる。

15. テュルク人女性 (Turkiyāt)。彼女たちは、善さと白さとなめらかさを併せ持っている。その顔は陰鬱となりがちで、その目は小さくて甘い。彼女たちの中には、茶色ですべらかなものもいる。その体型は中ぐらいから低い間で、背の高いものは少ない。その美しさは極まり、その醜さは突出している。彼女たちは子供の宝庫、子孫の鉱山であり、その子供たちには滅多に獣性や体つきの荒廃や欲望が現れることはない。彼女たちは清潔で、彼ら〔子供たち〕の鍋や味覚 (qadw) の扱いに熟練し\*7、[txt. 408] 彼らはそれに調理も調味も消化も頼っている。彼女たちが変わった口臭がすることはほとんどなく、臀部の巨大なものもない。彼らには不快な本性があり、誠実さが足りない。

16. ダイラム人女性 (Daylamīyāt)。外見が善く、内面が美しい。しかし彼女たちは本性が最悪な人々で、肝臓がもっとも肥大している。彼女たちは苦難の際の忍耐力をもち、あらゆる面でタバリストーン人女性に似ている。

17. アラーン人女性 (Lāniyāt)。色は赤みがかかった白で、肉が多い。四要素

は冷が主である。彼女たちは快樂よりは奉仕に適している。というのは、彼女たちは性質がすばらしく、信用でき、本性が高潔で、世話をし協調することを好むからである。彼女たちは性欲からは遠ざかっている。

18. ルーム人女性(Rūmīyāt)。白で淡色。髪が直毛で目が蒼い。奴隷('abīd)として、服従的にして、協調的、奉仕的、真摯にして、誠実、信頼でき、世話好きである。彼女たちは倉庫係に適している。というのは、締めり屋で気前よさが足りないからである。もっとも〔金を握る〕彼女たちの手は細かい工芸を行うことができないわけではない。

19. アルメニア人女性(Armanīyāt)。アルメニア人には気品があるが、彼らは脚が獣のようであるという特徴もある。また優れた体格と、活力の旺盛さと、力がある。彼女たちには自制心が足りないか欠けており、盗みが横行している。彼女たちに吝嗇がみられることはまれである\*<sup>8</sup>。性質と言葉が粗暴であって、彼女たちの言語には清潔さが無い。彼女たちは奴隷('abīd)として、苦役を行い、奉仕的である。あなたが奴隷('abd)を一時間のあいだ勤めなしにしておいても、善事をなそうと考えるなどということはない。[txt. 409] 彼らは杖打ちと恐れを以てあたる以外に適しておらず、彼らには苦痛〔をともなう仕事〕や重労働〔をする〕以外に美質がない。あなたが彼らのひとりが怠惰にふけっているのをみたとすれば、それは力がないのではなく遊んでいる\*<sup>9</sup>のである。杖を手に取りなさい。彼を殴打し従命させ、あなたが彼に望むことを為すように注意深く仕向けなさい。というのは、この人種は、怒っているときはもちろん満足しているときにも信頼できないからである。彼らの女たちは快樂には適していない。一言で言えば、アルメニア人はビーダーン(bīḍān, 白い人々)のなかで最も邪であり、これはザンジュ人がスーダーン(sūdān, 黒い人々)のなかで最も邪なのと同様である。両者はお互いに体躯の力、腐敗の多さ、肝臓の肥大さという点で、なんと似ていることであろうか。

### (3) アムシャーティー『女奴隷と奴隷を選ぶための正しき助言』(部分)

1. 知れ。ペルシア(Fāris)の人々はいっとも身体(abdān)が優れている。

というのは、彼らは東方におり、その色は赤がちの白であり、その体躯が充実しており、その声は澄み、〔txt. 50〕その病は少ない。その姿は美しく、その本性は善であり、若葉 (a‘shāb) が多い\*10。彼らは静かで穏やかな人々であり、指導力、理性、知識、徳、誇り、名声をもつ。また奸計、ごまかし、邪念をもつ。グラームは訓練されれば、アミール、指導者、軍司令に適する。彼らの性質は主に、吝嗇、出し惜しみであり、なかでももっとも吝嗇なのはメルヴの人々である。民衆の大多数は、向こう見ずで喧嘩早く、反抗的で、徒党を組み、他見にながされやすい。戦いでは勇氣と熱情を発揮し、服従と従命からは遠い。性質として歌と楽器演奏に親しむ。そのグラームの顔は良く、体型、髪、後ろ姿は中庸である。

2. アジャムのうちテュルク人 (Turk)。テュルクは四要素のバランスがとれている点ではペルシアの人々と同じであり、体力や危難苦難の際の忍耐についてはペルシアの人々よりも優れている。その顔は陰鬱となりがちで、その目は小さくて甘い。その体型は中庸で、その美しさは極まり、その醜さは突出している。誠実さと慈愛が足りず、裏切りが多い。馬肉を食することが多いため肝臓が肥大している。彼らは、統治の知識や算術の知識、すばらしい工芸術や事務能力 (siyāsa) に恵まれてはいないが、戦争と戦闘において忍耐力を持つ。女たちは優雅さや丁重さが足りないが、子供の宝庫、子孫の鉱山である。〔txt. 51〕子供たちは体つきや顔が美しい。彼らは、清潔で、熟練し、気高い。消化能力に優れており、それゆえ彼らの体躯には変化がなく、変わった口臭がすることもない。彼らのうちでもっとも状態の良いものは、ホラーサーン近辺出身の者か、その者たちとの混血である。

3. アジャムのうちダイラム人 (Daylam)。知れ。ダイラム人は善さに恵まれている。彼らの身体は柔らかくなめらかで、その髪は美しい。彼らには事務能力、指導力、そして戦場における勇敢さと経験がある。そのグラームは、訓練されれば、教養とあらゆる勇敢な行為に向くが、算術の知識を身につけるものは少ない。また彼らは冷酷で、肝臓が肥大し、本性が悪であって、すぐに怒る。女たちは、見目麗しさをもち、同衾すると心地よい。彼らは苦難の際の忍

耐心をもつ。そのジャーリヤは、奉仕と快楽以外には適していない。

4. アジャムのうちクルド人(Akrād)。クルド人には不屈さ、力強さ、勇敢さ、[txt. 52]そして困窮の際の忍耐心を持つ。また彼らは無理強いをし、裏切りが多く、誠実さが足りない。そのグラームたちは、賤業(imtihān)や重労働以外には向かない。彼らには盗賊性や、略奪傾向があり、また愚かさがある。彼らに理性が足りないことは有名である。彼らとテュルク人の混血は勇敢で利口である。また彼らとアラブ人の混血は利口で聡明、知識と徳を身につけるのに向いている。彼らとルーム人の混血は器用で工芸を得意とする。女たちは子を為しやすく、彼女たちには交合に際しての良さ、心地よさがある。また彼女たちは世話好きで忍耐心がある。また彼女たちは賤業や奉仕にも適しているが、養育には向いていない。

クルド人の美点は美点の頂点であり、彼らには知識を身につけるのに忍耐心がある。山岳に住むクルド人では、そのその害獣(hāmma)は巨大となり、その過ちも増大し、その知性は鈍化し、その腐敗は増す。

5. アジャムのうちルーム人(Rūm)。知れ。ルーム人の人々は、その色が大部分は淡色(shuqr)であり、その髪は直毛で、目は蒼い。彼らは奴隸('abīd)として、服従的にして、協調的、奉仕的、真摯にして、誠実、世話好きで、信頼できる。彼らには並外れた気高さと利口さがある。そのグラームは、教育されれば教養や知識・戦闘術の全てを身につける。また彼らには知恵と正しき意見と名声があり、また吝嗇とどん欲と出し惜しみがある。同様に、女たちは倉庫係に適している。というのは、締まり屋で気前よさが足りないからである。ただし、彼女たちには教養が足りない。

6. アジャムのうちチェルクス人(Jarākisa)。彼らは見事な体型と、力と、勇猛果敢さ、[txt. 53]徒党心の持ち主である。彼らには知識と仕事と知恵がなく、熱意を持って背信と盗み、闘争と不協和を誇りとする。彼らには、妬み、尊大さ、傲慢さ、激しい吝嗇があり、約束に誠実でない。彼らには粗暴と横暴がある。彼らは自分たちより優れたものがあるとは認めず、自分たちがあらゆる名誉あるものに相応しく、自分たち以外のものには相応しくないと考えてい

る。彼らには戦場における勇敢さと力がある。彼らは戦いの第一撃を与えるものであり、そのことについて彼らに並び立つものはない。しかし、彼らは戦況が悪化し戦いが長引くと忍耐力に欠け、苦難の道よりも安易な道をとりがたがる。戦闘と対立において忍耐力をもたない。彼らには啓典の書がなく、宗教にこだわりがない。このためイスラーム領域に入ると、良くイスラームの宗教に親しむ。そのグラームは、イスラーム領域に至り良き仕事を訓練されると、それに親しみ、それを完璧にこなす。そしてそれらのうちからは、珍しくはあるが、ウラマーや官僚や宗教者があらわれる。

またそのグラームは、騎士道を訓練されると、それを完全に身につけ、完璧にこなす。彼らには気高さ、力、指導力がつき、アミールや軍司令に適する。特にこれを幼年期から少年期 (ghulāmīya) にかけて訓練されたものはそうである。若者 (fatā) は良き仕事を訓練されるのに最高であり、[txt. 54] 彼らのうち正しきものは並ぶものなく正しく<sup>\*11</sup>、すばらしき行いをし、善に導かれ、清浄なるシャリーアに従う。また彼らのうち道を外れたものは、並ぶものなく恥知らずにして不道徳、邪にして嘘つき、背信者にして盗み、熱意を持って言い争いと対立、不一致、流言をあおり、誠実さを持たない。そして彼らには妬み、ごまかし、激しい吝嗇がある。彼らの国の外で生まれた子供たちは、一般的に、気高さ、すばらしさ、知恵、意見を持たない。

チェルケス人は色が多様である。赤がちの白は利口で理解力があり理性的であり、理知的で意見と知恵を持っている。淡色 (ashqar) は、並ぶものなく恥知らずにして不道徳、邪にして、みすばらしく (ikhlāq) 嘘つき。とはいえ同時に、その肉体は瘦身である。精力的で、動きと言葉と殴打と欲望に身を任せることには迅速である。

黒や黄色と溶けあった茶色は、勇敢で志が高く、大胆である。もし黒が勝ると、臆病さと恐怖心を持ち、思念や思考が悪化する。そして恐怖に駆られた軽挙妄動がみられ、悪しき点や嫌悪すべき点がすばらしき点を凌駕する。また吝嗇が多く、寛大さと慈愛が足りない。

もし茶色に赤が伴えば、精力的で動きが迅速で、意見、知恵、聡明さ、利口

さ、力、打ち解けやすさ、安息感をもつ。邪から遠く、すばらしさと近い。この法則は一般的であり、のちにその証拠をあげるつもりである。神が望みたもうならば。

7. [txt. 55] アジャムのうちアルメニア人 (Arman)。彼らには気品と良さがあるが脚が醜い。彼らには優れた体格と、勇猛果敢さと、力がある。彼らには自制心が欠けており、背信と盗みが存在する。彼らには、出し惜しみと吝嗇、向こう見ずと軽拳があり、性質もまた言葉も粗暴である。また彼らは不潔(qadhāra)である。彼らは奴隸('abīd)として、苦役と奉仕を行う。時に応じて彼らを重労働から休ませるとするのは正しいことではない。というのは、奴隸('abd)は仕事なくなると、心のうちに善事を語ることは決して無いからである。彼らは杖打ちと恐怖を以てあたる以外に適しておらず、彼らには重労働〔ををする〕以外に美質がない。彼らは苦痛と欠乏を以てあたる以外に適しておらず、怠惰以外〔の理由で〕仕事ができないことはない。彼らは喜んでいるときにも怒っているときにも信頼できない。人は彼らについて信用しないよう、彼らを頼らないように気をつけなければならない。女たちは、快樂にも養育にも〔校訂原文欠〕にも適さない。

8. アジャムのうちフランク人 (Ifranj)。フランク人の色は白で淡色である。彼らの目は一般に蒼い。彼らには粗暴さと勇猛果敢さがある。また彼らには愚かさがあり、このため彼らは知恵や、理性的な知識や手仕事、工芸から遠ざかっている。彼らは運が非常に良くなければこれらに成果を上げることができず\*12、洗練されたものを生み出したり富を獲得したりすることもできない。彼らには吝嗇さと激しい出し惜しみがある。彼らは信用できず、奴隸とする利点もない。彼らには自らの宗教に対する信仰心がある。女は何事にも適さない。というのは、彼女たちは粗暴で冷酷で慈愛が足りないからである。彼女たちの子供は、気高さ、勇猛な力、体型の麗しさをもち、頬には赤みがさしている。

8. [txt. 56] アジャムのうちアラーン人 (Lāwun)。ルーム人の一人種である。彼らの色は赤を伴った白で、彼らの四要素は冷が主である。このため彼らの肉は堅い。彼らには思いやり、性質の良さ、本性の高潔さがある。このため

彼らは奉仕に適している。彼らは世話をし協調することを好む。女は奉仕に適し、快楽に適さない。これは彼らが主に冷で、性欲が足りないからである。この人種には知恵や理性的な知識は何もなく、熱意がないため細かい工芸にも向いていない。また彼らには怠け癖がある。

9. アジャムのうちヒンド人(Hind)。ヒンドの地は東方の南部の最初の土地にある。彼らは体型の良さに際だっており、彼らには、茶色く豊かな美、単純な清らかさ、柔軟さ、なめらかさ、息の香しさがある。彼らには理性と分別があり、また彼らには知恵と、約束への誠実さ、俠らしさ、非常な世話好きさ、底の深さ、弁舌の鋭さがある。彼らの心は痛みに耐えられない。[txt. 57]もし苦痛や怒りに苦しめられ、その必要があれば、大罪すら犯し、殺人をも意に介さない。彼らには老いや老化はあまり早く訪れない。彼らは財産や名誉を守ること、細かい工芸の仕事に適している。彼らには巨大な腐敗があり、彼らの正しさには比肩するものはおらず、彼らの邪悪さにも比肩するものがない。彼らには衰え(nazalāt)が素早く訪れる。女は子を為すのに適しており、細かな仕事や洗練された工芸には適さない。

10. アジャムのうちスインド人(Sind)。彼らは東と西の間におり、彼らの性質は主にヒンドの性質に近い。彼らには巨大な腐敗があり、信頼に足りない。彼らのうちの奴隷(‘abd)は姦淫を抑制することができず、そのためには衣服をも売り払うほどである。彼らに正しい行いは少なく、信頼できるものにも欠けている。女は男たちよりは行いが正しい。彼女たちは腰が細く、体型が扇情的で\*13、髪が長い。

11. アジャムのうちバルベル人(Barbar)。これは西と南の間にある島である。[txt. 58]彼らの色は一般的に黒いが、黄色いものもいる。彼らは精力的に奉仕をし、生まれつき服従する。しかし、男は性質的に打ち解けづらく反抗的である。そのグラームは、育てられ教育されればそれを受け容れ、何かを訓練されればそれに馴れる。女は、より教育に向いており、より子供たちに親愛の情をもち、より奉仕と服従をあらゆることに於いてその性質としている。彼女たちの子供たちには気高さがあり、一説に抛れば、アラブ男性とバルベル女性から

の混血児たちは、より気高い。

12. アジヤムのうちザランジュ人 (Zaranj)。一説に拠れば、ザランジュと、ヒンドの中部にあるリサーン (al-Lisān) の町の間は2ヶ月行程である。彼らは性質が粗暴であり、彼らには香しさと洗練された振る舞いがある。また彼らは肌が柔らかく、腰がかたちよい。一説に拠れば、女は、交合の際に強い麝香のような香りのする汗をかくという。彼女たちは気高さに欠けるため、子を為すには適さない。

[スーダーンの人種の記述]

知れ。西の果てにあるスーダーンの地、ムラーワ (Murāwa)、ザガーワその他は、大洋の西部および、大洋とヌビアの間の平原のうちにあつて、[txt. 59] 諸王国から孤立しており、オアシスの平原ともうひとつ別の平原に続いて、南に達している。

知れ。彼らの黒さ (sawād) が強くなればなるほど、彼らの姿は醜くなり、彼らの歯は鋭くなる。また彼らの使い道は少なくなり、彼らのもたらす害は多くなる。そして一般に彼らは本性が悪しく、頻繁に逃亡する。

ガレノスに拠れば、スーダーンには彼ら以外に見られない10の特徴がある。縮れた髪、薄い眉毛、広がった鼻翼、厚い唇、尖った歯、悪臭のする膚、悪しき本性、皺の寄った両手両足、長い男性器、激しい情動 (kathra al-ṭarab) である。一般に彼らが情緒的であるのは、脳が腐敗しているからであり、このため理性が弱くなっているのである。

1. 情動が最も激しいのは、他のすべてのスーダーンではなくザンジュ人であつて、彼らには知識が失われている。知性が腐っているため、彼らには洗練された工芸は適していない。彼らには、激しさと忍耐力と重労働に対する適性がある。彼らは自分たちの言葉以外を正しくしゃべることはない。彼らが最も得意とするのは笛吹きと踊りである。「もしザンジュ人が天から地へ落ちたとしたら、リズムに乗って落ちるだろう」と言われている。彼らは唾が多いので口中が最も綺麗な人々である。彼らに唾が多いのは消化機能が腐っているからで

ある。「ザンジュ人は満腹になれば、懲罰を与えても苦痛を感じない」と言われている。ザンジュの女は、幼児の授乳や養育、踊りと笛吹きに適しているが、その膚の悪臭と腋臭、体躯の粗野さゆえに性交 (nikāḥ) には適していない。

2. [txt. 60] スーダーン人種のうちエチオピア人 (Ḥabash)。彼らの国は、紅海〔沿岸〕の、ザンジュとヌビア、鉾山の平原そして荒廃した平原のうちにある。彼らはフランクよりも行いが正しく、彼らには財産と名誉について任せることができる。彼らは肉体の弱さと心の力で際だっており、このため命が短く、往々にして結核と消耗熱がすぐに彼らを見舞う。彼らが、育った土地以外に適応することは滅多にない\*<sup>14</sup>。彼には、すばらしさと自制心、正しさ、そして訓練されれば、服従と奴隷奉公 (‘ibāda) において忍耐力がある。彼らのうち正しきものは正しく、邪悪なものは邪悪である。彼らには、利口さ、聡明さ、理性、自制心がある。彼らの体躯は柔らかくなめらかである。彼らは歌にも踊りにも適していない。女たちは、男よりも従命に於いて従順で、彼女たちの中には、子宮が暖かいので性交 (nikāḥ) 時に心地よいものがある。彼女たちの子供には気高さがなく、力もない。多くの場合、この子供たちには、ごまかし、いかさま、邪さ、凶兆、盗賊性があり、彼らに良き点は少ない。良き点とは、すばらしさ、親しさ、理解力、利口さ、親愛、愛情の頂点のはずであるが、しかし〔実際には〕悪を内に隠して、美を外に出しているだけである。一般的に彼らには、[txt. 61] 恨みや妬み、腐敗傾向がある。

3. スーダーンのうちザガーワ人 (Zaghāwa)。彼らは、本性と性質において、もっとも下劣なエチオピア人、もっとも墮落したザンジュ人である。彼らは怒鳴り声やうなり声を上げる。彼らの肝臓は、彼らがもっともきつい労働 (ashaqq al-a‘māl) を行うようにするが、それに全く適していない。女たちは工芸や手仕事に適しておらず、性交にも適していない。

4. スーダーンのうちブジャ人 (Buja)。彼らには国がなく、遊牧の天幕生活をし南と西の間、エチオピアとヌビアの間に居住している。彼らの色は金色である。顔は良く体躯はなめらかである。彼らには勇気と心の力があるが、盗みが性質となり熱意を持っており、その機会を逃すことはない。このため彼らは

倉庫係や警備には適していない。彼らには、歩き進むことに忍耐力があり、エチオピアにはこれに比肩するものはいない。このため彼らから伝令が採用される。

女たちは、なめらかで色が良く、幼少のうちにジャーリヤとして連れてこられれば、ブジャの人々が彼女に加える虐待から逃れており、性交に適している。というのは、彼らのもとではジャーリヤが育つと、その陰部に向かい、それを切り裂いて骨が見えるまでその中の肉を取り去ってしまう。こうして彼女らは性交に役立たなくなる。

5. スーダンのうちヌビア人 (Nūba)。ここは、エジプトのスーダンの端から、〔txt. 62〕そこと西のスーダンとの間にある平原へ、また彼らとブジャの間にあるまた別の平原へ、さらに紅海へと至るまた別の平原と至る間、である。この人種には従順さ、なめらかさ、洗練さがあるが、その体軀は、肌が柔軟で乾いている。彼らには鋭く且つ堅固な力がある。彼らは地元を離れるとすぐに病気や疾患に見舞われる。ナイル川の水を飲まされると重篤な血液の病にかかる。わずかな痛みや重労働でも彼らの体軀を苦しめる\*<sup>15</sup>。彼らの本性は清浄である。彼らには、すばらしさと宗教心と自制心と節制心、主人たち (sādāt) 購入主たち (mawlā) たちへの従容がある。また彼らには奴隸身分 ('ubūdiya) への容認があり、そのために連れてこれられたかの如くである。女たちには気高さがあり、性交すると最初のときには心地よさがある。ジャーリヤが若く両腰がほっそりしているならば、性交が技巧的であり、男に打ち解けやすいが、子供を養育するのにはよくない。彼女たちには自らの名誉と主人の財産を任せることができる。

6. スーダンのうちカンダハール人 (Qandahār)。この人種はそのあらゆる特徴においてヒンド人種に近い。その女たちはあらゆる女に優る点がある。それは、彼女たちの処女は破瓜の際に、他の女にはないほど心地よい。というのは彼女たちの陰部が狭いからである。これは彼女たちの女性一般と交合するときも同様であって、彼女たちは処女のようなものである。彼らには親愛の情がある。また彼女たちの体軀のなめらかさは他にはないほどである。

この人種の男たちは、知恵がなく、知識もなく、事務能力もない。彼女たちの子供には気高さと、奉仕心と、正しさがある。げにいと高き〔神〕はもっともよく知り断じたもう。

### 3. 内容の検討

#### (1) 共通点と相違点

ここまでみたように〈奴隸購入の書〉においては、ある人々の集団が「人種(jins, pl. ajnās)」と規定され、それぞれの身体的特徴、性格、そして職務への適性が、非常にあからさまな本質主義的優劣の判断とともに記述されている。この判断は、この集団に一律に適用され個人的な差違を完全に捨象したステレオタイプのレッテルである。現代においては「偏見」「先入観」と称されるべきものであろう。

このような「jins」というアラビア語名詞は、語源的にはまさしく均質性、同質性を示す語根 JNS から派生した名詞であり、人間や生物だけでなく様々な集合的事物の種類、部類を示す。さらにまた人間の場合は性別 (sex)、家族 (family) そして人種 (race)、国民 (nation) をも示すという。事実、現在のアラビア語では日本国籍は al-jinsiya al-Yābāniya と表現される。すなわち人間を対象とする場合、jins とは「何者かに何らかの点で均質とみなされる」人間集団を意味するのである。

ここで、逆に問題となるのは「人種」および「race」という用語である。ルイスは race に関して、この言葉の意味が20世紀半ばに大きく変化したと主張する。彼に拠れば20世紀半ばまで race とは、現在言うところの an ethnic group すなわち一義的には言語によって、また文化、歴史ときには地理的基準によって規定された集団を、意味していた [Lecois 1990: 16-17]。これに対して人類学者が生物学的特徴から白、黒、モンゴルなどの大分類とその下部分類を与えた。このような生物学的記述はエスニック的な特徴とは異なったものであり、現代のアメリカを中心として世界に広がった新たな race 概念は、この白人、黒人、モンゴル人という大分類のみを示している、とする。そして、その

著作では主に「黒人」という人種<sup>1</sup>の存在を前提として議論を進めている。同様に『広辞苑』第4版も「人種」を生物学的な区分としている。

しかし、現代の社会学的な人種論は、このような race や人種に関する定義に否定的である。例えば T.H. エリクセンは、人種の4分類が現代の遺伝学的に相応しくなく、人種とは「生物学的」現実性を有しているかどうかは別として文化的構築として存在するとして、人種関係とエスニシティ<sup>2</sup>を区別しないことを宣言している[エリクセン 2006: 26-28]。一方で、現代の科学者にとって人種生物学的調査自体が事実上タブーであるとする指摘も存在する [ホバマン 2007: 376]。少なくとも、ルイスの人種概念に関する主張は、学問的には正しくない。現代においても、エスニック集団と人種を別物と割り切ってしまうことはできず、人種を生物学的の差違ととらえる思考法自体も過去のものである。「黒人」とは今も社会的定義なのである。

このような目で jins 概念を眺めた場合、「均質な特徴を持つと意識された集団」という意味では、ルイスの指摘する新旧 race 概念のいずれもがその範疇に入りうる。また「性別」「家族」など、さらに別の概念も加わりえよう。その上で〈奴隷購入の書〉が語る jins とは、医学的・血統的・性格的そして文化的特徴を備えおり、「生物学的人種」と「エスニック集団的人種」の双方の要素を含んだ概念であると言えそうである。そして、ふたつの〈奴隷購入の書〉は明らかに共通する jins 概念を前提として奴隷論を展開している。

これに対して、両者の差異は大きくいって2点を指摘可能である。(1)イブン・ブトラーンが主として女奴隷を扱っているのに対して、アムシャーティーは男奴隷を中心に、女奴隷を含めて扱っていること、(2)アムシャーティーはイブン・ブトラーンの扱わない jins をも扱っていること、である。

まず性別の違いであるが、イブン・ブトラーンの jins 集団の叙述は基本的に女性形である -yāt, hunna を用いて行われている。概して、彼の叙述は性別の記述が混乱しており、それまで女性で論じていた文章に突然男性指示代名詞や動詞の男性形が紛れ込むなど理解に苦しむ箇所が存在する。佐藤次高の理解と私の理解が食い違う点のいくつかは、この部分の処理方法の違いによる [佐藤

1991: 28-30]。しかし、全体としてイブン・ブトラーンは基本的に奴隷を女性の集団として扱っているようである。これを、生物学的な男女の違いではなく、奴隷が集団として男性性を奪われ、女性格として扱われた結果とみる解釈も可能ではあるが、アムシャーティーの記述内容と比較した場合、イブン・ブトラーンの叙述には女性性に関わる記述が多くみられ、やはり基本的に女奴隷を中心に取り扱い、男奴隷は補足的に取り扱っているのではないかと理解したい。

これに対して、アムシャーティーの叙述は基本的に男性形を用いており、女奴隷の集団を論じるときのみ女性複数形を用いる。アムシャーティーの叙述には、明らかにイブン・ブトラーンにはみられない戦場での記述や男性性の記述が多数認められることから、彼が男奴隷を中心に扱っていることは明らかであろう。ところが、アムシャーティーの記述には、イブン・ブトラーンの記述を継承した部分が多数存在する。このため、イブン・ブトラーンにおいては、ある *jins* の女性の特徴として記述されていた特徴が、そのままその *jins* の男性もしくは男女共通の特徴に移行している部分が多数存在している。またさらにその一部に男性的特徴を付け加えている部分も多い。その意味で、両者のテキストは表面的にはほぼ同じ文章でありながら、性別という点でそのコンテキストが大きく異なっている部分が存在することが指摘できる。

次に扱う *jins* の違いであるが、これは明らかに時代の影響を大きく受けている。イブン・ブトラーンのみにみられる *jins* はイエメン、アムシャーティーのみにみられる *jins* はペルシア、クルド、チェルケス、フランクである。少なくともチェルケスとフランクはマムルーク朝の状況を大きく反映している。前者は後期マムルーク朝の主力を為す人々であり、後者は十字軍によって中東と強い接触を持つようになった人々である。いずれもイブン・ブトラーンの時代には社会の前面には出てこなかった集団である。特にチェルケスに関する記述はアムシャーティーのなかでもっとも詳細であり、フルースィーヤについても述べられるなど、格別の関心を払われている。おそらく、アムシャーティーの記述が男性を中心としているのもこのことと関係があるであろう。

イブン・ブトラーンがバグダードを離れたのはブワイフ朝アブー・カーリー

ジャーナル死去の翌年であり、その6年後にはトゥグリル・ベクがバグダードに入城している。一方、本人死去の2年後にはマラズギルドの戦いでセルジューク朝がビザンツ帝国を破っており、その間彼はファーティマ朝とセルジューク朝の奪い合う、独立都市国家としてのシリア諸都市などを巡っていた。ブワイフ朝末期のバグダードといい、トゥルク系奴隸軍人の勢力が社会の重要な位置にはあっても、決定的要因とは言い難い時代と地域に生きていたのである。これに対してアムシャーティーは、すでに250年にわたるマムルーク統治下のエジプトに暮らしていたのであり、奴隸購入と関わってチュルク系やチュルク系軍事奴隸の購入を度外視するわけにはいかなかったであろう<sup>\*16</sup>。軍人であるなしに関わらず、アムシャーティーは頻繁にグラムやその教育・訓練について論じているのである。これに対して、イブン・ブトラーンの関心のあり方は、より一般的な奴隸に対する人々の関心が、やはり女性と特にその性的魅力／性的搾取にあったことを端的に示しているといえよう。

## (2) jins と学問

先述の通り〈奴隸購入の書〉が前提とする jins は、生物学的・血統的・性格的そして文化的特徴を備えた概念である。多くの場合、出身地、肌の色・髪や目の色、体型などによって定義され、特定の性格や職務適性、肉体的適性を持つとされる。少なくとも〈奴隸購入の書〉においては、それらの性格や肉体的特徴は、奴隸としての特定の職務に向いているかどうか、すなわち主人が使用する道具として、その機能に適性があるかどうかを判断する根拠として用いられている。

ここで注目すべきは、①この jins がもつ血統概念は、我々の認識する遺伝的形質とは大きく異なること、② jins が、生育した「土地」の影響を強く受けること、③にも関わらず、この jins による奴隸機能論のあり方は極めて科学的なものとして認識されていたことである。

まず、jins と血統の関係であるが、イブン・ブトラーンは第4章冒頭で、用語の解説として以下のように述べている。

「もし私が「ペルシア女性 (Fārisīya)」といったならば、それはペルシアの混血女性 (muwallada Fārisīya) であると知れ。たまたま両親共にペルシアであるということもあるが、そうでなくとも彼女の父親だけで十分なのである。ザンジュ女性の子孫 (walad) は、白人 (biḍ) との間に子を為すことが3度繰り返されると、黒さ (sawād) が白く (abyaḍ) なり、平たい鼻が鉤鼻となり、その手足は柔軟になり、その本性は馴致される。あらゆる人種 (jins) においてこのようであることを理解せよ。」 [Buṭlān: 402]

この文章を、佐藤次高は「ザンジュの子供であっても、白人との婚姻をくり返して三代をへれば、黒人は白人となる [佐藤 1991: 31]」と理解し、社会的同化の慣行を示すものとしている。しかしこの文章全体を通してみると、男Aと女Bが子供を為した場合、その子は自動的にAの jins に分類される。たとえ「白人」とザンジュ人のように形質が大きく異なっても同様の婚姻が3代くり返されればザンジュ人の形質は失われるので、jins 分類において女性側の形質を問う必要はない、と主張していることが理解される。つまり〈奴隷購入の書〉においては、血は基本的に父親のものを受け継ぐとみなされるのである。

レインに拠ればアラビア語で awṣā li-jinsi-hi という表現は、He left by will, of his property, to the children of his father, [or his kindred by the father's side,] exclusively of all relations of the mother. を意味する<sup>\*17</sup>。ここでは jins とは父系の親族集団なのである。jins 分類が自動的に父系のものを採用される背景はこのようなところにも求めることができよう。母方の遺伝形質はひとまず捨象される。

つぎに、jins の分類においてはその生育地が重視される。イブン・ブトラーンが第4章の章題を「生育地や土地に応じた奴隷の人種の記述」とするように、それぞれの jins は、その生育地の地理的位置を記述される。また jins 的特徴は、血の継承だけでなく環境によっても獲得される。イブン・ブトラーンがベルベール女性の項で述べる例ではメディナ女性、メッカ女性、イラク女性の jins 特徴は、それぞれの土地に数年間滞在することで獲得される。

このメッカ女性やメディナ女性またターイフ女性についても、アラブ男性の

娘が奴隷身分となりうるのは法的にも限られたケースに過ぎないことや [柳橋 2001: 540; 544]、メディナ女性の中にザンジュ人がいるという記述からしても、彼女たちは、何れかの土地から輸入され、メッカやメディナに滞在することによって、その地の *jins* とみなされるようになったと考えられる。すなわち、*jins* は血統とは全く無関係に「土地への滞在」によっても形成されるのであり、そのような場合の *jins* とは、土地の社会や文化に馴染み、その行動様式を身につけ、その風土の中で生活することで形成される同質な集団であると考えざるを得ない。特にこれらの地の女奴隷の場合、歌姫に代表される「女らしさ」「艶っぽさ」などの特殊技能を身につけた閉鎖集団を想定することも可能かもしれない。

最後に、このような、生物学的遺伝要素以上に「土地」とその地の社会のあり方に左右されて形成される *jins* は、しかし一方で「科学的」なものであると意識されたと思われる。ルイスはイスラーム世界に、テュルクと騎馬術、ペルシアと統治術、ギリシアと哲学など特定のエスニック集団と特定の技能適性との間に関連性を持たせる言説が存在し、それが9世紀のササン朝文学の翻訳やジャーヒズの著作から現れるとしている [Lewis 1990: 44-46]。しかし、ミュラーに拠れば、イブン・ブトラーンやアムシャーティーの著作は明らかにヒポクラテスからガレノスを経由するギリシア医学や、アリストテレスに由来する観相学の系統を汲んだ書物である [Müller 1980: 221]。事実、イブン・ブトラーンは、女奴隷 (*jāriya*) や奴隷 (*‘abīd*) の職務についてそれぞれに適性のある *jins* を列挙した箇所、これらが「アレキサンダーの教師」その他の学者や哲学者による文章 (*rasā’il*) の断片からまとめたものであると主張している [Ibn Buṭlān: 383]。すなわちムスリム医学者たちは、このような概念がギリシア医学・哲学から継承されたものであると、認識していたのである。どの *jins* がどのような性格をもち、それ故にどの職務に向くかという優劣の判断は一見きわめて独断的・個人的判断のようにみられる。しかし、その判断が少なくともイブン・ブトラーンとアムシャーティーを隔てる400年にわたって、脈々と継承されていることを考えると、これは当時の医学者にとって、確固とした学問的成

果であり、「事実」として受け継ぐべきものであったと考えざるを得ない。

同様に、ハンウィックが指摘するように、このような考え方の基盤のひとつには、風土決定論とも言うべき科学的思考法が存在した [Hunwick 2005]。アフリカの土地は暑いために肌が黒くなり、その気性が陽気になるといった言説は、14世紀のイブン・ハルドゥーンによってよく知られているが<sup>\*18</sup>、ルイスの指摘するように9世紀の文学者イブン・クタイバや10世紀初頭の地理学者イブン・ファキーフ・ハマダーニーに同様のものがみられる [Lewis 1990: 45-46]。10世紀のマスウディーは著名な科学者・哲学者であるキンディーの著作から、気候風土が身体や性格に与える影響を引用している [al-Mas'ūdī, v. 1: 92]。一方、イブン・ブトラーンの著作では東西南北の4地域ごとの肌色や本性の違いの比較がなされ [Ibn Buṭlān: 403]、アムシャーティーの著作では空気や水が住民の本性を含む *jins* を決定することが指摘されている [Amshāṭī: 41]。このような地理学的思考法もまたギリシャの学問に由来することを考えれば、〈奴隷購入の書〉の *jins* による機能的分類とステレオタイプの言説は、医学者を含む当時のムスリムにとってはまさしく「科学的思考」であったと言うことができよう。ある「人種」の奴隷を重労働に駆り立てることは、科学的に正しい選択であったのである。これは、まさしくアメリカ黒人奴隷をプランテーション農業に駆り立てる白人奴隷主の理論的な支えであった「科学」的人類学とパラレルなものであったとすることができる。

### (3) ザンジュ人とアルメニア人：重労働と肉体懲罰に適した *jins*

〈奴隷購入の書〉にみられる *jins* は以上のような性格をもつが、そのなかでひとときわ注目すべきが、「黒人」のうち〈もっとも邪な〉ザンジュ人と「白人」のうち〈もっとも邪な〉アルメニア人に関する記述であろう。「お互いに体躯の力、腐敗の多さ、肝臓の肥大さという点で」酷似すると評される両者には、イブン・ブトラーンが指摘する以外にも、非常に顕著な共通点が存在する。それは、両者がともに苦役、重労働に適性があるとされ、肉体懲罰が容認されている点である。

一般にイスラームの奴隷制では家内奴隷が中心であること、また奴隷に対する虐待がイスラーム法によって厳然と禁止されていることが強調される。しかし、地方総督に対するカリフからの任命文書に逃亡奴隷の取り締りに関する条項が盛り込まれるなど [Şābi': 157, 198]、奴隷の逃亡は「起こりえる事態」であり、その背景には奴隷の側の自らの境遇に対する不満があったことは間違いない。特にイラク南部の沼沢地帯で肉体労働に従事していたザンジュ人奴隷は、9世紀後半に起きたシーア派反乱に大規模に荷担しており、中世イスラーム史における、奴隷の大規模労働の数少ない実例として知られている [Popovic 1976]。もっとも従来、この例は貴重な例外として扱われてきた。史料は奴隷の肉体労働に関する情報をほとんど伝えないからである。

ザンジュ人とアルメニア人が肉体労働・重労働に適しているとする 〈奴隷購入の書〉の記述は、奴隷に対するこのような労働需要が存在したことを示唆する。ザンジュ人が大規模な反乱ののちの時代においても、同種の労働に対する適性があるとされている点は興味深い。またイブン・ブトラーンがこれらの適性を伝えるのはザンジュ人とアルメニア人のみ、アムシャーティーでもこれにクルドのグラームが限定的に加えられるのみである。

そしてこのザンジュ人とアルメニア人に賦課される肉体労働は、彼らに対する肉体懲罰とセットで語られていることに注目しなければならない。

イブン・ブトラーンは同書の導入部で「どの *jins* が服従と絆をもつ奴隷であるのか、どの彼らが自尊心と熱情をもつのか、どの彼らが苦役 (*kadd*) と杖打ち以外に適さないのか」と問いを設定し、「名誉と財産を守るための〔男〕奴隷 (*'abīd*) を欲するならば、ヒンド人とヌビア人、苦役と奉仕を欲するならばザンジュ人とアルメニア人、戦いと勇気を欲するならばテュルク人とスラヴ人 (*ṣaqāliba*)」と自ら答えている [Ibn Buṭlān: 383]。苦役・杖打ち・ザンジュ人とアルメニア人というつながりをここでも明確に見て取ることができる。

またアムシャーティーは奴隷に対する懲罰について以下のように述べている。「人々が言うには、殴打に馴れ、罵倒や口論に慣れている奴隷 (*'abd*) を買ってはならない。一説に拠れば、最もすばらしい奴隷とは彼のために〔不要となっ

た)杖を折る奴隸であり、最も邪な奴隸とは彼のために杖を買う〔必要のある〕奴隸である。もし奴隸が杖を必要とするならば、その者〔自体〕を必要とせず、益もない (lā khayra)。〔一方〕ある者が言うには、奴隸を杖なしに買ってはならない〔という〕。この人物が述べているのはザンジュ人のことである。というのは、彼らは最も邪な奴隸だからである。一説に拠れば、これは賤業 (mihna) の奴隸のことである。というのは彼らは杖打ちを以てあたる以外に適していないからである [Amshāṭī: 37]。アムシャーティーにおいてもザンジュ人は「最も邪」であり、杖打ちを前提とする奴隸と伝えられているのである。mihna という単語は意味範囲が広いため意味の特定が難しいが、クルド人グラムについて「賤業 (imtihān) と重労働」とあることからすると同様の方向で捉えるべきかと思われる。

このように、kadd, ‘amal shāqq, mihna などと呼ばれる特定の労働を行う奴隸に対しては、杖打ちなどの肉体懲罰を用いることが正当化もしくは推奨されていた。ザンジュ人は「満腹になれば懲罰を与えても苦痛を感じない」とされ、アルメニア人に至っては、「苦痛を伴う仕事や重労働以外に美質がない」「杖打ちと恐れを以てあたる以外に適していない」とされる。彼らにはひとときの休みをも与えるべきではなく、また油断をすれば怠惰にふける存在であるとされる。このような扱いは、肉体労働に「適した」もしくは「特化した」アルメニア人とザンジュ人(そして一部のクルド人)のみにみられる態度であり、他の jins および彼らに適した職務には全くみられない特徴なのである。

〈怠惰にふける労役奴隸は肉体懲罰と恐怖を以て管理するべきである〉という言葉説は、アメリカのプランテーション奴隸労働主に典型的にみられるものと同じである [ウェッバー 1988: 82-87, 179-183]。一方、どれほど熱心に働いても社会的自己実現や生活レベルの上昇をもたらさないプランテーション奴隸にとって、怠業が重要かつ意識的に選択された奴隸主に対する抵抗手段であったこともまた、アメリカの奴隸たちの肉声によって伝えられている [ウェッバー 1988: 167-168, 188-190]。時代・地域そして社会状況の異なるザンジュ人とアルメニア人に、この事例を直接適用することは適切ではないかもしれない。し

かし、19世紀ザンジバルの奴隸制を実見したオマーンの王女が、

Above all, the negro is fond of his rest and goes to work only when he is compelled; so the strict control is necessary for him to carry out his part of the work which, in comparison with the requirements set in these parts, is quite small. [Sayyda Salime 1993: 328–329]

とその奴隸懲罰を正当化するとき、ザンジバルでプランテーション制度が施行されていたことを考えに入れても、肉体労働・怠業・懲罰による労働強制というセットが、ある種の普遍性をもつことが想定される。

そして、このセットは今回取り扱った〈奴隸購入の書〉においては、特定の jins にのみみられる、いわば jins の特徴のひとつなのであり、そこでは、特定 jins と特定労働・肉体懲罰が固定化して概念化されているのである。

#### (4) 黒人、白人、jins

前節でみたように、ザンジュ人とアルメニア人は労働奴隸として身体懲罰すべき「人種」であった。かれらは「黒人」「白人」として「もつとも邪」であり、それゆえにこそ身体懲罰が奨励された。しかし、それは同時に懲罰する主人と懲罰される奴隸という、明確な支配＝抑圧関係を生み、このことが彼らを「もつとも邪」と判断する差別・偏見の温床となったともいえる。

実のところ、訳文を通読すればわかるように、〈奴隸購入の書〉の当該部分は、現代の我々の目から見れば、偏見と差別のみによって成り立っていると言っても過言ではない。一見、褒め称えている美質もあくまで「奴隸として使用するに際しての」美質でしかなく、しかもそれは、「科学的な」本質主義によって個人ではなく jins 全体に一般化されたものとして叙述されている。ただし、注意しなければならないのは、〈奴隸購入の書〉の差別と偏見がほぼ全方位に向かっていることであり、必ずしも白人と黒人という二項対立をとってはいないことである。

特にイブン・ブトラーンにおいて、明らかに否定的な評価を与えられているのは、ザンジュ人とアルメニア人という jins であって「黒人」という jins では

ない<sup>\*19</sup>。スビア人、エチオピア人、ブジャ人に対する評価は決して低くない一方で、ザガーワ人はザンジュ人よりも低い評価を与えられているなど、「黒人」とされる jins に対する評価には大きなばらつきが見られる<sup>\*20</sup>。

一方、アムシャーティーにおいて注目すべきは、ザンジュ人の属性の拡大現象である。アムシャーティーは、jins 全体を「アラブ」「アジャム」「スーダーン」と分類しており、すでにこの時点で「黒人」という部類をもうけている。さらにそのなかでアムシャーティーは、イブン・ブトラーンがザンジュ人の特性として記述したいくつかの特徴を、スーダーン全体の特徴へと拡大している。黒さが増すほど、醜くなり、歯が尖り、使い道が減り、害が増えること、また本性が悪く逃亡しやすいことがそれである。

さらにアムシャーティーは、「黒人」のみにみられる10の特徴を挙げているが、これらは、いわゆる生物学的人種偏見の典型ともいえるものであり、過度に一般化・戯画化された外面的特徴と偏見に満ちた内面的評価が組み合わさったものとなっている。ただしこれだけを抜き出すといかにも強烈であるが、アムシャーティーが他の jins に下す評価と並べると、表現の強弱の問題こそあれ、同一線上に展開していることが明らかである。ここでも、人種偏見が「黒人」のみに向けられたものではないことがわかる。

この10の特徴は、10世紀の歴史家マスウーディーが提出した極めて著名なものであり、マスウーディー自身がこれをガレノスに典拠するものと述べている [Mas'ūdī, v. 1: 91]。ここでもやはり、jins に対するステレオタイプな記述は、ギリシア医学に由来する科学的なものと表明されているのである。そして、アムシャーティーにおいては、このガレノスの言説とされたものを援用することによって、イブン・ブトラーンのザンジュに対する否定的評価を「黒人」全体に対するものへと拡大しているのである。

#### 4. おわりに

レイスの指摘するように、古くからアラブ・イスラーム世界には厳然として「黒人」に対する差別的な言説が存在した。アッバース朝カリフ＝ラーディーは

「本性に悪影響があるから」と黒人の手を介したものは食べなかったと伝えられる [Mas'ūdī, v. 1: 92]。8世紀のジャーヒズが黒人擁護論を執筆したのも、「黒人」と「白人」という言説を前提としてのことであった。「黒人」に関する否定的な言説のみを並べ立てれば、二項対立的な「黒人否定」「白人賛美」的世界観を再構成することは容易であろう<sup>\*21</sup>。

しかし、〈奴隷購入の書〉にあらわれる世界はそのような単純なものではない。そのなかでは、多様な jins が、奴隷としての適性という機能主義的な観点から本質主義的に評価され、ギリシア医学等の科学的言説を根拠としてステレオタイプの性格を付与される。さらにその言説は、特定の jins と特定の機能・性格を固定化させるため、その jins に属するとみなされる個人を、容赦なく特定の機能へと駆り立て、ときには肉体懲罰をも正当化するのである。この言説に従えば、「白人」とみなされるアルメニア人に分類された人々は、「黒人」ザンジュ人に分類された人々と並んで、過酷な肉体労働に従事させられる運命を担っている一方で、チェルケス人とされた人々はエリートへの道を開かれる。

イスラーム世界の奴隷制度は特定の「人種」集団に対する科学的固定的な言説によって支えられていた。そしてその言説は、「黒人」「白人」という二分法よりもはるかに複雑な構造をもっていた。その構造は、「白人支配者」が「黒人奴隷」を、プランテーション経営のために労働奴隷と少数の家内奴隷としてのみもちいたアメリカと異なり、社会の様々な集団が、極めて多様な形態で奴隷を用いた前近代イスラーム社会の構造に適応していたと言えよう。機能別に固定された jins の多様性には、多様な形態の奴隷需要との、何らかの関連性が認められるであろう。そして同時にそれは、無条件で身体懲罰にさらされる危険を、特定の jins 集団に固定化させる言説をも生んだのである。

いずれせよ、このような特定の jins とセットになったステレオタイプの評価が、アリストテレスやガレノスに由来する伝統的な医学的・哲学的知と意識され、様々な奴隷の扱いを決定する際のガイドとして用いられてきたこと。このことは、イスラーム社会における奴隷の問題を考える上で、非常に重要な意味を持つと思われる<sup>\*22</sup>。

## 【主要参考文献】

- al-Amshāṭī, Maḥmūd b. Aḥmad (d. 902/1496), *al-Qawl al-Sadīd fī Ikhtiyār al-Imā' wa al-'Abīd*, ed. Muḥammad ʿĪsā Ṣāliḥiyya, Bayrūt, 1417/1996.
- Ibn Buṭlān, Abū al-Ḥasan al-Mukhtār b. al-Ḥasan (d. 458/1066), “Risāla Jāmi'a li Funūn Nāfi'a fī Shirā' al-Raqīq wa Taqlīb al-'Abīd”, in 'Abd al-Salām Hārūn ed. *Nawādir al-Makḥṭūṭāt*, vol. 1, Bayrūt: Dār al-Jīl, n. d.
- al-Mas'ūdī, Abū al-Ḥasan 'Alī b. al-Ḥusayn (d. ca 345/956), *Murūj al-Dhahab wa Ma'ādin al-Jawhar*, ed. Charl Pellat, vol. 1, Tehrān, 1422 A. H.
- al-Ṣābi', Abū Ishāq Ibrāhīm b. Hīlāl (d. 384/994), *al-Mukhtār min Rasā'il al-Ṣābi'*, ed. Shakīb Arslān, Bayrūt, n. d.
- Brown, R.H., (1993) “Cultural Representation and Ideological Domination”, *Social Forces* 71/3.
- Gordenberg, D.M., (2005) *The Curse of Ham*, Princeton.
- Hunwick, J.O. & E.T. Powell (2002) *The African Diaspora in the Mediterranean Lands of Islam*, Princeton.
- Hunwick, J.O., (2005) “A Region of the Mind: Medieval Arabic Views of African Geography and Ethnography and their Legathy”, *Sudanic Africa* 16, 103-136.
- Lewis, B., (1990) *Race and Slavery in the Middle East: An Historical Enquiry*, Oxford.
- Lovjoy, P.E. ed., (2004) *Slavery on the Frontiers of Islam*, Princeton.
- Marmon, S.E., (1999) “Domestic Slavery in the Mamluk Empire: A Preliminary Sketch”, in Shaun E. Marmon ed. *Slavery in the Islamic Middle East*, Princeton, 1-23.
- Miura, T. & J.E. Phillips, (2000) *Slave Elites in the Middle East and Africa*, London.
- de Moraes Farias, P.F. (1985) “Models of the World and Categorical Models: The Enslavable Barbarian as a Mobile Classificatory Label”, in J.R. Willis ed. *Slaves and Slavery in Muslim Africa, v. 1: Islam and the Ideology of Enslavement*, London, 27-46.
- Müller, H., (1980) *Die Kunst des Sklavenkaufs*, Freiburg.
- Popovic, A., (1976) *La revolte de esclavage en iraq*, Paris.
- Sayyda Salema (or E. Ruete), (1993) *An Arabian Princess between Two Worlds*, ed. E. van Donzel, Leiden.
- イブン・ハルドゥーン（森本公誠・訳）（1979）『歴史序説』第1巻、岩波書店  
ウェッパ、トーマス・L・（西川進・監訳）（1988）『奴隷文化の誕生』新評論  
エリクセン、トーマス・ハイランド・（鈴木清史・訳）（2006）『エスニシティとナショナルイズム：人類学的視点から』明石書店

- 佐藤次高 (1991) 『マムルーク』 東京大学出版会  
シーガル, ロナルド・(設楽國廣・監訳) (2007) 『イスラームの黒人奴隷』 明石書店  
清水和裕 (2005) 『軍事奴隷・官僚・民衆』 山川出版社  
ホバマン, ジョン・(川島浩平・訳) (2007) 『アメリカのスポーツと人種』 明石書店  
柳橋博之 (2001) 『イスラーム家族法』 創文社

## 注

- \* 1 奴隷エリート全般については [清水 2005] [Miura & Phillips 2000]、アフリカの奴隷についてはとりあえず [Lavejoy 2004] [シーガル 2007] などのみよ。
- \* 2 例えば [Goldenberg 2005] [Brown 1993] をみよ。
- \* 3 校訂注 [Ibn Buṭlān: 404 n.5] は、ベルベル島はイエメン周辺の島とされるが、ここで扱われているのは、部族名からしても北アフリカのベルベル人である、とする。
- \* 4 おそらく、出産 (lida) の誤りであろう。
- \* 5 文意をとることができなかった。諸賢のお教をを請いたい。
- \* 6 「肝臓の肥大」とは、邪悪な性格の比喩である。
- \* 7 校訂案を廃し、校訂注に記載された原文に従って訳した。
- \* 8 アムシャーティーは吝嗇であるとしている。
- \* 9 校訂案を廃し原文に従った。
- \* 10 ここの文意が不明である。ご教示を請いたい。
- \* 11 ここから段落の終わりまでの写本の異同は、校訂に従って訳出した。
- \* 12 校訂案を廃し原文に従った。
- \* 13 校訂案を廃し原文に従った。
- \* 14 19世紀アメリカにおいてもエチオピア人など「黒人」が虚弱であるという言説が存在し、その「劣等性」について「科学的説明」が試みられた [ホバマン 2007: 272-286]。
- \* 15 イブン・ブトラーンの記述が意図的に変更されている。アムシャーティーがエジプトを生活の場としてヌビア人との接触が多かったことを反映しているか。
- \* 16 アムシャーティーが下敷きとした Taḥqīq も13世紀後半成立とみられるため、マムルーク朝期に入っている。
- \* 17 E.W. Lane, *Arabic English Lexicon*, 2vols., Cambridge, 1984 JINS 項を参照。
- \* 18 [イブン・ハルドゥーン, v. 1: 158-167] は気候と種族の性格の関係、種族・民族における血統と習慣や地理的環境について論じており、いわゆる「黒人に対するハムの呪い」を否定している。ハムの呪いについては、[Lewis 1990: 125] [Goldenberg 2005] に詳しい。
- \* 19 [Lewis 1990: 138 n.3] はザンジュ女性の項目を訳出した上で、“there are similar

or even worth comments on other African groups. Among whites, Ibn Buṭlān most dislikes the Armenians.”とコメントしている。しかし、訳出部を参照すればわかるように、ザンジュ人と「同等もしくはそれより悪い」コメントをされているのはザガーフのみであり、その他のアフリカ系集団にはおおむね高い評価が与えられている。また、ザンジュ人と並んで貶められているアルメニア人に対して、ルイスはこの注でその存在に触れるのみである。ルイスの著書が、ザンジュ人という jins に対する偏見と「黒人」に対する偏見をあえて混同する姿勢を持つこと、またイスラームの黒人偏見のみを取り上げ喧伝する構造をもっていることは、この注からも明らかである。

- \* 20 Zanj, Ḥabash といった「黒人」jins のカテゴリーと地理的知識については、[de Moraes Farias 1985] も参照。
- \* 21 その意味では、地中海イスラーム世界の「黒人」奴隷に関する様々な情報を列挙した [Hunwick & Powell 2002: 36-37] が、一つの典型である。同書はイブン・ブトラーンのザンジュ人に関する項目のみを Negative Stereotype と題して訳出し、他の黒人奴隷に対する差別・偏見の記事と並べている。同書の趣旨からすれば、これは全く正当な史料操作であるが、一方で、イブン・ブトラーンの著作や「奴隷購入の書」史料群全体の文脈を切り捨て、「黒人」偏見のみを強調する結果となっている点は否めない。なお同書の企画自体がルイスの主導するものであった点にも注意したい [Hunwick & Powell 2002: vii]
- \* 22 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金による研究課題基盤(A)「近代移行期の港市における奴隷・移住者・混血者」(研究代表者・弘末雅士) および基盤(C)「アッバース朝書記史料による書記官僚社会と文書行政の総合的研究」(研究代表者・清水和裕) の研究成果の一部である。